



Title	『源氏物語』の出家の表現：男女の違いをめぐって
Author(s)	アッタヤ, チョーティカプラカーア
Citation	詞林. 2002, 32, p. 13-23
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67489
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『源氏物語』の出家の表現

—男女の違いをめぐつて—

チヨーテイカプラカーリ・アツタヤ

「源氏物語」では、多くの登場人物がそれぞれ出家する。出家の理由はさまざまであるが、女性の方はつらい男女関係が原因で出家する場合が多い。特に、密通した女性は皆出家する。一方、男性の方は厭世的感情を持ち出家を願う者が多いが、結局出家にいたる者はほとんどない。本稿では、「源氏物語」における出家に着目し、出家する時の心情やその場面に用いられる言葉を考察し、男女のそれぞれの出家のあり方、対照的な出家のパターンについて論じていく。

一 男の「厭世」について

「源氏物語」の男女の出家を見ると、男性の方は女性とは違ひ、もともと道心を持つてゐる者が多い。

①いにしへより本意深き道にも、たどり薄かるべき女方にだにみな思ひ後れつつ、いとぬること多かるを、みづからの方には、何ばかり思ひ迷ふべきにはあらねど、

(若菜下 二六〇)

②いはけなかりしより、思ふ心ざし深くはべるを、三条宮の心細げにて、頼もしげなき身ひとつをよすがに思したるが避りがたき絆におぼえはべりて、(夢浮橋 三六七)

①は源氏の言葉で、自分が昔から出家の意志を強く持つていると述べている。②は薰の言葉で、幼いころから出家の意志が深いが、母の女三の宮が絆となり、出家の願いが果たされないと述べている。「源氏物語」において、「いにしへより」、「いはけなかりしより」など、以前から道心を持っているという文は男性の場合だけに使われる表現である。女性の場合には、もともと道心を持っていると述べられることはまつたくない。

また、男性が出家を願う時には、世のはかなさを深く感じ、厭世的感情を持つというパターンが見られる。

③常なき世はおほかたにも思つたまへ知りにしを、目に近く見はべりつるに「厭はしき」と多く、思ひたまへ乱れしも、(葵 六〇)

④かくおほかたの世につけてさへわづらはしう、思し知る

ることのみまされば、もの心細く、世の中なべて厭はし
う思しならるるに、さすがなること多かり。

(花散里 一四五)

⑤世の中思しつづくるにいとど厭はしくいみじければ、後

るとも幾世かは経べき、かかる悲しさの紛れに、昔よ

りの御本意も遂げてまほしく思はせど、(御法 四九七)

⑥世の中をかりそめのことと思ひとり、厭はしき心のつき

そむることも、わが身に愁へある時、なべての世も恨め
しう思ひ知るはじめてなん道心も起るるわざなめる
を、

(橋姫 三三)

⑦世の中をことさらに厭ひはなれぬとすすめたまふ仏など

の、いとがく、いみじきものは思はせたまふにやらむ、
見るままにものの枯れゆくやうにて、消えはえたまひぬ
るはいみじきわざかな。

(総角 三二八)

③④⑤は源氏の場合であり、③は葵の上の死後、④は藤壺

が出家してしまった後、⑤は紫の上の死後である。ここから、

源氏の出家願望の根底には「世を棄う」という気持ちがある

と見られ、この気持ちによつて源氏の道心は徐々に深まつて
いくことが分かる。⑥は妻との死別などで世のはかなさを経
験した八の宮の心であり、⑦は大君の死後の薰の心である。
世のはかなさを深く感じた二人は、それぞれ「世を厭う」と
いう気持ちになり、道心が深くなると見られる。「厭う」とい
う言葉は「源氏物語」の中に四十三の用例があるが、「世の

中」が「厭う」の対象であるのは十五例である。「世を厭う」という言葉は男性の出家願望を表す時に頻繁に用いられているが、女性にはこの言葉はほとんど用いられない。

明石入道の場合も厭世的感情にもとづく出家だが、「世を厭う」という言葉は彼の出家には用いられない。彼の出家は、次の⑨⑩⑪のように、何回も「世を棄てる」という言葉で表されている。

⑧すべて世の中を棄てたる身にて、年ごろともかくも尋ね
知らぬを

(松風 三九〇)

⑨世の中を棄てはじめしに、かかる他の国に思ひ下りはべ
りしこども、ただ君の御ためと、

(松風 三九四)

⑩この身は長く世を棄てし心はべり、君たちは世を照らし
たまふべき光しるければ、

(松風 三九五)

山本利達氏は、時勢に迎えられず、都での生活を棄てたい
という点で、明石入道の出家は厭世的感情にもとづく出家と
いうべきであると述べている。つまり、彼の「世を厭う」気
持ちは、都での生活を棄てること、「世を棄てる」とことと結び
ついているのである。それに対して明石入道以外の男性には、「世を棄てる」が使われることもあるものの、この言葉よ
り他の言葉の方が多く使われている。他の男性が、厭世的な
感情を持つ最大の原因是、愛する人との死別である。源氏は
夕顔、葵の上、藤壺、紫の上などとの死別で、八の宮も妻と
の死別で、薰も大君との死別で「世を厭う」気持ちは次第に

深くなる。しかし、明石入道の場合は他の男性とは違い、妻も子供もそろつていて、愛する人との死別ではなく、世の中が彼を生きがたくし、それで出家したのである。山中裕氏は、

「当時の貴族層では、出家・受戒後本当に僧侶となつて修行生活に入る者もあるが、一般には在家信者として仏弟子となるためのものである。」と述べている。【源氏物語】の中では、

出家後、住んでいた場所を捨て、山の奥で暮らす人物はほとんどいない。とくに女性は出家した後も、まだもとの場所に

住んでおり、夫や子供の世話をになる。しかし、男性、例えば、朱雀院や明石入道は、それぞれ出家した後、住んでいた場所を捨てる。そのため、「世を棄てる」という言葉は、女性の出

家よりも男性の出家に数多く使われているのだと考えられる。朱雀院の出家は病気が大きな原因だと考えられるが、彼も厭世的感情を持つっている。

⑪「世の中こそ、あるにつけてもあぢきなきものなりけれ、と思ひ知るまことに、久しく世にあらむものとなむさらに思はぬ。」
（須磨　一八九）

ここでは、「世をあぢきなく思ふ」という表現で朱雀院の厭世的な感情を表している。「あぢきなし」という言葉はこの物語の中に六十七の用例があるが、「世の中」が「あぢきなし」の対象であるのは十五例である。この表現は、男性の出家願望を表す時に頻繁に用いられているが、女性の出家願望

を表すのには用いられない。

⑫去年今年とうちつづき、かかる事を見たまふに、世もいとあぢきなう思さるれど、かかるついでにも、まづ思立たることはあれど、またさまざまの御絆し多かり。

（賀木　九〇）

⑬年ごろ学び知りたまへることどもの、深き心を説き聞かせたてまつり、いよいよ、この世のいとかりそめにあぢきなきことを申し知らすれば、

（橋姫　一一九）

⑭中将は、世の中を深くあぢきなきものに思ひましたる心なれば、なかなか心とどめて、行き離れがたき思ひや残らむなど思ふに、

（匂宮　一三三）

⑯では、父の桐壺院がなくなった後、源氏の道心が深まることが述べられている。⑮では八の宮の道心、そして、⑯では薫の道心が述べられている。「(世が)あぢきなし」という言葉も、男性の出家を願う気持ちや厭世的感情を表す時にしばしば使われているのである。

【源氏物語】では、多くの男性は道心を持つて出家を望むが、子供や恋人のことが「絆」となるため、出家を延ばしたり、結局出家しなかつたりする。【源氏物語】の中の「絆」は二十八例あるが、もつともよく「絆」について言及されるのは、源氏で七回あり、次は八宮四回、朱雀院三回、薫一回、あとの人物は二回以下である。源氏の「絆」の多さが窺われるが、もつとも頻繁に彼の「絆」と言われる人物は紫の上であ

る。

(15) うしと思ひしみにし世もなべて厭はしうなりたまひて、かかる絆だに添はざらましかば、願はしきさまにもなりなまし、と思すには、まづ対の姫君のさうぞうしくてものしたまふらむありさまで、ふと思しやらる。

(葵 四四)

(15) では、源氏は紫の上のことが自分の出家の「絆」だと述べている。鈴木日出男氏は、「源氏は、紫の上とともに生きることが、そのまま現世に生きることのすべてであるよう、な認識にあり、したがつて彼女の存命するかぎりその出家を遂行することができない」と論じている。また、阿部秋生氏は、「もし紫の上が死ななかつたらば、源氏は出家することを考へえなかつたであろうし、六条院の主人としての生活をさらにつづけていったことであろう」と論じている。紫の上の存在は源氏の出家の一番重大な絆と思われるものなのである。次に、他の男性の場合を見よう。

(16) なべての世の中すさまじう思ひなりて、後の世の行ひに

本意深くすみにしを、親たちの御恨みを思ひて、野山にもあくがれむ道の重き絆なるべくおぼえしかば、とさ

まかうざまに紛らはしつつ過ぐしるを。(柏木一七九)

(17) 「あり経るにつけても、いとはしたなくたへがたきこと多かる世なれど、見棄てがたくあはれなる人の御ありさま心ざまにかけとどめらるる絆にてこそ、過ぐし来つ

れ。独りとまりて、いとどさまじくもあるべきかな。いはけなき人々をも、独りはぐくみたてむほど、限りある身にて、いとをこがましう人わろかるべきこと」と思したちて、本意も遂げまほしうしたまひけれど、見ゆづる人なくて残しとどめむをいみじう思したゆひつつ、

(橘姫 一一〇)

(18) 思ふ心ざし深くはべるを、三条宮の心細げにて、頼もしげなき身ひとつをよがに思したるが避りがたき絆におぼえはべりて、かかづらひはべりつるほどに、おのづから位などいふことも高くなり、身のおきても心にかなひがたくなどして、思ひながら過ぎはべるには、またえ避らぬことも数のみ添ひつは過ぐせど、(夢浮橋三六七) (19) は柏木の場合で、親たちが出家の「絆」だった。(20) で、八宮は女君たち、大君と中君のことが「絆」で、出家しなかつた。(21) は薰の場合で、母の女三の宮のことが出家の「絆」となつた。「源氏物語」の男性たちはそれぞれ「絆」ゆえに結局出家ができなくなるのである。

しかし、朱雀院の場合は他の男性とは違い、「絆」を思いながらも、出家してしまつた。

(19) 「この御いそぎはてねれば、二日過ぐして、つひに御髪おろしたまふ。(中略) 今日は、世を思ひ澄ましたる僧たちなどだに、涙もえとどめねば、まして女宮たち、女御、更衣、ここらの男女、上下ゆすり満ちて泣きとよむにいと

心あわただしう、からで静やかな所にやがて籠るべく思しまうけける本意違ひて思しめざるも、ただこの幼き宮にひかされて、と思しのたまはす。(若菜上二三七)

㉙背きにしこの世にのこる心こそ入るやまみちのほだしなりけれ

(若菜上六八)

⑯は朱雀院の出家する場面で、「ただこの幼き宮にひかされて」とあるように、朱雀院は女三の宮のことを心配しながら出家する。㉚は出家後の朱雀院が紫の上へ送った歌であり、ここで朱雀院は女三の宮のことを「ほだし」と言つてい。他の男性は絆のため出家しないのに、朱雀院は絆を思いながら出家してしまうのである。

【源氏物語】の男性たち、源氏、八の宮、薫などは、絆があるまま、あるいは、心が迷つているままでは出家しないという理想の出家を追い求めるが、結局その出家は物語に描かれることはなかつた。八の宮と柏木は結局出家せずに死んでしまい、薫も物語の最後まで出家しなかつた。源氏の出家は幻巻に暗示されるが、遂に描かれることはなかつた。つまり、初めから出家している人物は別として、【源氏物語】の男性で、その出家が描かれるのは、朱雀院ただ一人ということになる。しかし、彼には絆がないということではなく、彼は絆があるままで出家するのである。【源氏物語】の男性たちは出家を願つていながらも、皆それぞれ「絆」に心を引かれてしまつたのである。

以上、「源氏物語」の男性の多くは、もともと道心を持つておらず、そして、世のはかなさを見るにつれて、彼らの道心は深まつていくが、「絆」のせいいで出家を延ばしたり、結局出家しなかつたりする者が多いと見て来た。世のはかなさを経験して厭世的感情を持ち、そして出家を願うのは男性の出家のパターンのようである。では、女性の出家には、どんなパターンがあるか、また、女性の出家願望はどのような言葉で表現されるのか、次に見ていく。

二 女の「憂し」について

【源氏物語】には出家する女性が多く登場しているが、本稿では出家の描写が多く、出家後も登場する女性たち、藤壺、空蝉、女三の宮、浮舟、六条御息所の場合に注目して考察する。

女性の出家願望を表すのにもつとも数多く用いられる言葉は「憂し」である。

①おほかたのうきにつけてはいとへどもいつかこの世を背きはつべき

(賀木一二五)

②ただこの河内守のみぞ、昔よりすき心ありてすこし情がりける。「あはれにのたまひおきし、数ならずとも、思し疎までのたまはせよ」など追従し寄りて、いとあさましき心の見えければ、うき宿世ある身にて、かく生きとま

りて、はてはてはめづらしき」とどもを聞き添ふるかな
と、人知れず思ひ知りて、人にさなむとも知らせで、尼
になりにけり。

(関屋 三四四)

①は藤壺が源氏と贈答する歌である。ここで、藤壺はこの世が「憂し」と思つて出家したが、いつになつたら世を捨て切ることができるのだろうと述べている。ここでは、彼女の出家の動機は「憂し」という言葉で表されている。②では、繼子の河内守の好色な下心をきらつた空蟬が、繼子にいいよられる自分のことを「うき宿世ある身」と思い、そのつらい運命から逃れるために出家している。彼女が自分を「うき身」であると考えていることは、源氏との密通の場面や他の場面においても数多く見られる。

③いかくうき身のほどの定まらぬ、ありしながらの身にて、かかる御心ばへを見ましかば、あるまじきわが頼みにて、見直したまふ後瀬をも思ひたまへ慰めましを、
④身のうさを嘆くにあかで明くる夜はとりかさねてぞねもなかれける
⑤女君、心うき宿世ありて、この人にはさへ後れて、いかなるさまにはふれまどふべきにあらん、(中略)身ひとつのみにて嘆き明かし暮らす。
(関屋 三五四)
③と④は源氏と密通した時であり、ここでも、空蟬は自分を「うき身」と思つてゐる。⑤は夫の常陸守が亡くなる時で

あり、親にも夫にも早く死別した彼女はこのような自分の運命を「うき宿世」、「うき身」と思つてゐる。空蟬は「うき身」という思いを強く持つてゐるのである。そして、繼子にいよいられた時にも、同じ思いを持ち、繼子との縁を切るために出家してしまつた。つまり、彼女が出家したのは男性とのつらい縁がある自分の運命から逃れるためなのである。

藤壺と空蟬の出家をめぐる心情は、同じく「憂し」という言葉で表されている。一人の出家の共通点を考えると、二人は同じく、自分に恋心をもつて迫る繼子から逃げるため出家したということが言える。藤壺の方は源氏から逃げるためであり、空蟬の方は河内守から逃げるためであつた。藤壺と空蟬の他に、女三の宮と浮舟もつらい男女関係から逃れるために出家した。

⑥うき世にはあらぬところのゆかしくてそむく山路に思ひこそ入れ
(横笛 一三三)

⑦「世の中にはべらじ」と思ひたちはべりし身の、いとあやしくて今までべるを、心憂しと思ひはべるものか
ら、よろづにものせさせたまひける御心ばへをなむ、言ふかひなき心地にも、思ひたまへ知らるるを、なほ世づかずのみ、つひにえとまるまじく、思ひたまへらるるを、尼になさせたまひてよ。世の中にはべるとも、例の人にて、ながらふべくもはべらぬ身になむ」と聞こえたまふ。
(手習 三三三)

⑥は女三の宮の場合であり、ここから、彼女が出家をもとめるのは「うき世」から逃れるためだと分かる。⑦は浮舟の場合であり、彼女は「世の中」を「心憂し」と思つて出家を願つてゐる。密通した女三の宮と浮舟は、それぞれ「うき世」、すなわち、男女の世から離れたくて出家を求めてゐるのである。

女三の宮の密通に対する気持ちは「憂し」という言葉で何回も表されており、また、先述の⑥のように、「この「憂し」という気持ちは彼女に出家を求めさせたのだが、彼女が出来する場面を見ると、「憂し」という言葉がなく、代わりに「つらし」「うらめし」という言葉が用いられている。

⑧大臣は、いとよう人目を飾り思せど、まだむつかしげにおはするなどを、とりわけ見たてまつりたまはずなどあれば、老いしらへる人などは、「いでや、おろそかにもおはしますかな。めづらしうさし出でたまへる御あります、かばかりゆきまでにおはします」と、うつくしみきこゆれば、片耳に聞きたまひて、さのみこそは思し隔つることもまさらめ、と恨めしうわが身つらふて、尼にもなりなばやの御心つきぬ。(柏木二九一)

⑨「尊きことなりとも、御身弱ては行ひもしたまひてんや。かつはつくるひたまひてこそ」と聞こえたまへど、頭ふりて、いとつらうのたまふ、と思したり。つれなくて、恨めしと思つことありけるにや、と思たてまつりて、恨めしと思つことありけるにや、と思たてまつりて、恨めしと思つことありけるにや、と思たてまつりて、

たまふに、いとほしうあはれなり。とかく聞こえ返さひ思しやすらふほどに、夜明け方になりぬ。帰り入らんに、道も昼ははしたなかるべしと急がせたまひて、御祈禱にさぶらふ中に、やむごとなう尊きかぎり召し入れて、御髪おろさせたまふ。

(柏木二九七)

⑧では、不義の子を産んだ女三の宮は源氏のつめたい態度を恨めしく思い、わが身がつらくて、尼になつてしまいたいと思っている。女三の宮の「恨めし」「つらし」という気持ちは、次の⑨の出家の場面にもまた語られる。女三の宮の密通に対する気持ちは、「憂し」という言葉も含め、いろいろな言葉で語られるが、「つらし」「恨めし」という気持ちは、出家する場面以外はどこにも語られないのである。

女三の宮の出家の翌日、六条御息所の物の怪が姿を現した。

⑩後夜の御加持に、御物の怪出で来て、「かうぞあるよ。いかしこう取り返しつと、一人をば思したりしが、いと妬かりしかば、このわたりにさりげなくてなん日ころさららひつる。今は帰りなん」とてうち笑ふ。いとあさましう、さは、この物の怪のここにも離れざりけるにやらんと思すに、いとほしう悔しう思さる。(柏木三〇〇)

物の怪の「日ころさららひつる」という言葉から、物の怪が数日間女三の宮に取り付いていたことが分かる。このように、女三の宮の出家は物の怪との関わりがあつたと考えられ

る。

(11) 物の怪「わが身こそあらぬさまなれそれながらそらおぼれる君はきみなり

いとつらし、つらし」と泣き叫ぶものから、(中略)「なほみづからつらし」と思ひきこえし心の執なむとまるものなりける。その中にも、生きての世に、人よりおとして思し棄てしよりも、思ふどちの御物語のついでに、心よからず憎かりしありさまをのたまひ出でたりしなむ、いとうらめしく。」

(若菜下一二二七)

(11) は紫の上が病氣をした時に出現する六条御息所の物の怪の言葉だが、ここで物の怪は何回も「つらし」という言葉を繰り返し、また、源氏を「恨めし」と思つてゐることが分かる。女三の宮の出家する時の気持ちが、「憂し」という言葉によつてではなく、いつもとは違う「つらし」、「恨めし」という言葉によつて表されることについては、六条御息所の物の怪の影響が考えられる。彼女は出家する時、六条御息所の物の怪に取り付かれているので、「憂し」の代わりに、物の怪と同じく「つらし」、「うらめし」という気持ちの言葉を使つたのだと考えられる。そして、物の怪が退散した後、「憂し」という言葉はまた使われるようになり一方、「つらし」、「うらめし」は使われなくなるといふことなのである。

ここまで見て來たように、密通した女性たちは、それぞれ「憂し」という気持ちで出家を求めてゐる。「憂し」という気

持ちの対象に「身」と「世」が多く見られるが、「身」に対する思いをもつとも数多く持つてゐるのは空蝉であり、一方、「世」に対する思いをもつとも数多く持つてゐるのは浮舟である。浮舟の「世」に対する思いは、彼女が死と出家を決意する時にしばしば述べられている。

(12) 「まろは、いかで死なば。世づかず心憂かりける身かな。かくうきことあるためしは下衆などの中にだに多くやはあるなる」とて、

(浮舟一七三)

(13) からをだにうき世の中などめずはいづことをはかと君もうらみむ

(浮舟一八五)

(12)(13) で、浮舟は自分がこの世では生きていけないと思つて、この世から逃れるために水に身を投げて死を決意した。しかし、それは果されず、横川僧都に救われてしまつた。その後、前述の(7)のように、彼女はふたたびこの世を棄てるために出家を決意した。これについて、増田繁夫氏は、浮舟は「尼になる」ことを死ぬのと同様のことと考えてゐる。死ぬかはりに尼にならうとしたのである。反省的に出家を考えてゐるのではない」と論じてゐる。⁽⁵⁾ 浮舟は薫と匂宮とのつらい三角関係のせいいで、「憂き世」から逃れたい意志が深まつていき、この世を棄てるために死と出家を決意したのだ。それは次の浮舟の歌からもはつきり見られる。

(14) しきものに身をも人をも思ひつつ棄ててし世をぞさうに棄てつる

(手習三三九)

「世を棄てる」は第一節で見たように男性の出家によく用いられているが、【源氏物語】の女性の中で「世を棄てる」という言葉を使って自分の出家を述べるのは浮舟だけである。

浮舟と他の女性の相違点を考えると、浮舟は出家後、すべてを棄て、新しい世界で出家生活をするが、他の女性は出家後、恋人や子供の世話になり、もとの世界に住んでいる。藤壺は出家後も宮中に出入りし、空蟬は源氏の世話になる。六条御息所は娘と一緒にもの場所に住んでいる。女三の宮は最初

は源氏の世話になり、のちに薰の世話になる。浮舟だけがすべてを棄て、夫の世話にもならず、新しい世界で出家生活をする。そのため、「世を棄てる」という言葉は、他の女性の出

家には用いられず、浮舟の出家の場合にしか用いられないのだと考えられる。

(15) ⑮は六条御息所の出家する場面である。彼女は伊勢から帰京した後、急に重い病気をわざらい、心細く、しかも斎宮のところで何年も過ごした罪の深さを心配し、出家したのである。しかし、彼女は出家した後、すぐ亡くなってしまった。出家してから死ぬまでの間には遺言の場面しかないが、その場面では、彼女は「尼」や「入道」とは呼ばれず、「女」と呼ばれている。

(16) ⑯かくまでも思しとどめたりけるを、女もよろづにあはれに思して、斎宮の御ことをぞ聞こえたまひ。

(濡標 三〇〇)

六条御息所は源氏とのつらい関係のせいで、「憂し」、「つらし」という気持ちになることがあるが、彼女の出家の理由は、前述の四人の女性とは違い、男女関係から逃れるためではなく、また、「憂し」という気持ちで出家するのでもない。

(15) なほ、かの六条の古宮をいとよく修理しつくろひたりければ、みやびかにて住みたまひけり。よしづきたまへること古りがたくて、よき女房など多く、すいたる人の集ひ所にて、ものさびしきやうなれど、心やれるさまにて経たまふほどに、にはかに重くわづらひたまひて、ものないと心細く思されければ、罪深き所に年経つるも、い

みじう思して、尼になりたまひぬ。

(濡標 二九九)

(17) ⑰入道の宮よりも、ものの聞こえやまいかがとりなされむと、わが御ためつましけれど、忍びつつ御とぶらひ

常にあり。

(須磨 一五五)

⑯尼君も、ものあはれなるけはひにて、「かかる方に頼みきこえさするしもなむ、浅くはあらず思ひたまへ知られはべりける」と聞こゆ。

(初音 一五〇)

⑰夏ごろ、蓮の花の盛りに、入道の姫宮の御持仏どもあらはしたまへる供養せさせたまふ。

(鈴虫 三六二)

⑲文とり入れて見れば、「入道の姫君の御方に。山より」とて、名書きたまへり。あらじ、などあらがふべきやうもなし。いとはしたなくおはえて、いよいよ引き入られて、人に顔も見あはせす。

(夢浮橋 三七二)

⑳では、出家した藤壺が「入道の宮」と呼ばれており、(18)では、空蟬は「尼君」と呼ばれている。そして、(19)では、女三の宮は「入道の姫宮」と呼ばれており、(20)では、浮舟は「入道の姫君」と呼ばれている。しかし、六条御息所は他の女性とは違ひ、出家後は一回も「尼」や「入道」などと呼ばれることがない。彼女は出家前も出家後もずっと「女」として描かれ続けているのである。

ここまで眺めて来たように、女性の方は男性とは違ひ、道心によつてではなく、それぞれの抱える様々な理由で出家を求めており、特に、つらい男女関係のせいでの出家を頼う場合が多いと分かった。山本利達氏は、藤壺、女三の宮、浮舟が、男との関係から逃れようとして出家していることは、源氏や薫が出家に終始憧れをもちながら「ほだし」に引かれて愛情

の世界に生きていることとは対照的であると述べている。⁽⁷⁾女性の方は、男性とは違ひ、男女関係のことが出家の絆にはならず、逆にそれによって出家してしまう傾向があるのである。

以上、出家に關わる言葉を考察し、「源氏物語」における男女の出家のあり方を見て來た。「源氏物語」の人たちはさまざまな理由で出家するが、男性の方は、「世を厭う」、「世をあぢきなく思ふ」などの厭世的感情を持ち、そして出家を志向するという型が一般的である。一方、女性の方は、それぞれ個性的に描きわけられているが、つらい男女関係のせいでの「憂し」という気持ちになり、そして出家を志向する者が多い。この物語の男性たちが、出家生活に憧れを持ちながらも、それぞれ絆に引かれて俗の世界に生き続ける点は特徴的である。また、彼らの出家の絆となるものほとんどは女性である。男性の多くは、女性に心を引かれて出家できないのに対し、女性の多くは、男性から逃れるために出家する。このような対照的な男女の出家のあり方は、他の物語には見られない、「源氏物語」における出家の特徴なのである。

注

- (1) 山本利達「出家への心情」「源氏物語攷」 埼書房・平7
(2) 山中裕「源氏物語を読む」 吉川弘文館・平5

(3) 鈴木日出男「光源氏の道心—光源氏論」「講座源氏物語の世界」

第七集、有斐閣・昭57

(4) 阿部秋生「光源氏の出家」「光源氏論—発信と出家」東京大学出

版会・平1

(5) 増田繁夫「浮舟の出家」「日本文学研究大成源氏物語I」国書刊

行会・昭56

(6) 慶谷義隆「六条御息所の生靈について—その発生を中心にして」「研

究講座源氏物語の視界3」新典社・平8

(7) 前掲注(1)

※本文の引用は、日本古典文学全集「源氏物語」(小学館)によつた。

(Chotikaprakai Attaya / ཚොඤිකප්රකාය
ハーバード大学非常勤講師)